



故河合忠仁教授を偲んで

著者	宇佐見 太市
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	16
ページ	2-3
発行年	2008-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/2529

追悼 河合忠仁教授



故 河合忠仁教授を偲んで

外国語教育研究機構長
宇佐見 太 市

河合忠仁教授逝きて三か月になる。烏兎忽々の感が深い。

約40年間、親しくおつき合いさせていただいた。

初めての出会いは、私が20歳、彼が25歳で、奈良教育大学英語科主催の行事においてであった。当時の英会話ブームは凄まじく、大学生の私も四六時中、英会話活動に没頭していたが、高等学校教諭の河合先輩の英語がとても流暢であったことを覚えている。

私は1979年（昭和54年）4月に近畿大学教養部に専任講師として赴任したが、翌年河合先生も近大の専任講師になられた。私は1991年（平成3年）4月に関西大学文学部英文学科に異動したが、河合先生も1999年（平成11年）に関西大学文学部に移ってこられた。そして河合先生には翌年創設の外国語教育研究機構のためにご尽力いただいた。感謝の念に堪えない。

特に河合先生には、外国語教育研究機構発足と同時に新設した大学院文学研究科修士課程外国語教育専攻の英語教育部門で本領を発揮していただいた。現行の独立研究科・外国語教育学研究科ができるまでの2年のあいだ、彼は全精力をそこに傾注した。堅固な志操と使命感にあふれた真の教育者ならびに研究者であった。おそらくその2年間は彼の生涯においては黄金時代であったと思う。全院生に対する緻密で濃密な個別指導は正に教師の鏡であった。先生は寝食を忘れて院生指導に当たられた。大学院で河合先生の指導を受け、豁然と目を開かされた数十名の愛弟子たちの体内で今なお河合先生は生き続けておられることだろう。

河合先生は韓国の英語教育事情に精通しておられ、英語教育界の重鎮であられたが、その底には「英語学」の泰斗としてのお姿が常に見て取れた。先生は、時代が求めるがまま英語教育の方に行かれたが、彼の研究の真髄は紛れもなく英語学であったと思う。卒業論文も修士論文も、さらに近畿大学勤務時代に書かれた論文も、まさしく正統派の英語学者としての論考であった。膨大な資料収集と雄渾な筆致で構築された「河合学」は後進の道標となるだろう。

奈良教育大学英語科（大学院は神戸市立外国語大学大学院修士課程）の出身者の典型として、河合先生は常に英語の本を読んでおられた。現在の奈良教育大の様子は知らないが、少なくとも私たちの時代の奈良教育大学英語科は、まず「英語」ありきだった。常に英語の本に接する

という習慣を徹底的に体得させられた。私の場合は、文学関係、特に英米の小説ばかりを読み漁ったが、おそらく河合先生は、言語学・英語学関係の本に没頭されたことと思う。今から思えば一種のファッションであったかもしれないが、とにかくにも私たちは常に肌身離さず洋書を持ち歩いてきた。それが当時の奈良教育大学英語科の学統であったのだ。お亡くなりになる直前まで英書を読んでおられたという話を先生の奥様からお聞きし、そのことを実感した。

関西大学における先生の全学共通教育の英語の授業はまさに神業であった。ほとんど日本語を使わず、英米人並みの英語で全学生を魅了した。何度か授業を見せていただいたことがあるが、特に感心したのは先生の十八番である英作文の授業であった。河合先生の英語を操る自在な力にしんそこ敬服した。

また河合先生は生涯を通じて多くの大学用テキストを世に出された。私も若い時は人並みに何点か出したが、あれほど報われない仕事はない。今は幾分状況が変わったが、昔は、教材作成は研究業績にはいっさい入らなかった。「その他」扱いにすぎなかった。それにもかかわらず河合先生は、黙々とテキスト作りに専念なされた。改めて今、先生の教育者としての真摯な生き方に感動を覚えずにはいられない。

我々共通の恩師は、旺文社の大学受験ラジオ講座・英文解釈の授業で活躍しておられた宮田明夫先生（奈良教育大学名誉教授）である。ラジオ講座を聴いていた現在60歳前後の世代にはきっと懐かしい名前にちがいないだろう。宮田先生の英語力は抜群であった。外国人教師が宮田先生に解釈を求めて質問に来ている姿を何度も目撃したことがある。私自身は不肖の弟子だが、河合先輩は恩師・宮田明夫先生の薫陶のたまものである。そのことを宮田先生が一番ご存知だったと思う。

来春開設の外国語学部において河合先生には言語政策論と英作文の授業で力を存分に発揮していただきたかった。昨年秋、北千里の喫茶店でお話しさせていただいたとき、「外国語学部の件、期待しているよ」と強く励ましてくださった。先見性、行動力、人間性といったすべてを兼ね備えておられた英傑、河合先生が、天国から私どもの組織を温かく見守ってくださることを祈りつつ、筆を措く。

神のみもとの天の御国において安らかに眠りあれ。